

---

# 岩物語

ねむりねこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

## 【小説タイトル】

物語

〔 $\tau$ 〕  
〔 $\Pi$ 〕

N 3 9 3 6 B A

【作者名】

ねむりねこ

【おひさま】

王国の中には、王國のものではない皆の中の人々の、なんといふことはない日常。

基本ほのぼの、たまにシリアルス。念のためR-15にしておきます。

## 序（前書き）

突然的に書きたくなつて勢いのままはじめて投稿しました。  
よろしくお願いします。

## 序

深き森の裾に古き砦あり。

国に在りて唯一、國に従わざるもの。

彼の砦が守るは、人の定めし境にあらず。

砦は、在るがままに其処に在る、不可侵の域なり。

砦を治めるもの、すなわち門の守り人。

守り人は世界に与えられし恩恵。

障らず、侵さず、繋がざるもの。人の手には余る輶くびき。

故に、人の法にて従えることあたわず。

平穏を望みし人よ。

忘れるなけれ。違えるなけれ。

約定破られし時、門は開かれる。

彼方に視ゆるは終焉なり。

## 序（後書き）

投稿の仕方がわからない……。

## 一話 振り向けば

柔らかな陽射しの中をゆっくりと進む騎馬があった。

馬に揺られながら辺りを見回しているのは、まだ幾分幼さの残る顔立ちをした少年だった。

外套を羽織つてゐるために定かではないが、あまり体格はよろしくないようだ。手綱を握る手や鐙に乗せている足を見る限り、まだ成長途中であるのが窺える。

周囲を見回していた少年は視線を前に戻すと、本日何度目かになる溜息を吐く。

「…田舎だな…」

と、住んでいる者が耳にしたなら《むかつ》としそうな発言も、まあ同意できなくもない。

何せ少年の進んでいる道は、馬車が通れるくらいの幅はあるものの舗装されておらず、獸道に毛が生えた程度（少年の感想）にでこぼこしている。道の周囲はやたら太い樹が視界を遮り、たまに開けたかと思えば牛が長閑に牧草を食んでいるような牧歌的な景色ばかり。「いくら辺境つたって、あんまりじやないか…？」

憤る、といふよりはやや不安の滲んだ声がこぼれる。

この三田、街と呼べる人里はなく、宿すら疎らにある民家に頼むか野宿という状態なのだ。しかも、今日は周囲の樹木が全く途切れる様子がない。つまり、森の中である。

「道、間違えてない…よな…？」

道幅がそれなりにあるため、陽射しがまつたく遮られているわけではないからいいようなものの、これで薄暗かつたらかなり不気味だと少年は思う。

進めば進むほど深みに嵌るよつた錯覚に少年は首を軽く振り、馬の足を速める。

陽が中点を過ぎてから傾いた頃、ようやく目の前が開けた。と、

言つても街が見えたということではないのだが。

そこには一面の畠があつた。そして喜ぶべきことに、今日初めて

目にする人影と、畠の向こうには石造りの大きな建物。

近付くと人影はほつかむりをした女性だと分かつた。スカートを履いていたからだ。背中を向けてるので年齢は判らないが、農婦にありがちな恰幅の良さはなくほつそりとした体格をしている。それでも手に持つた鍬を振るう動きにぶれはなく、ザクザクと耕していく様はなかなかに見事なものだった。

「そここの者。あそこに見えるのはグランデイルの砦に相違ないか？」馬上から降りることなく声をかけた少年に、農婦が鍬を持つ手を止めて振り返る。

「…君、だれ？」

訝しげな聲音で訊き返す無表情な顔の持ち主は、少年と大して違わない年頃の若い娘だった。

## 一話 振り向けば（後書き）

え、エラーで終わる……なぜでしょう？

## 一話 出会い頭に喧嘩腰

少年は驚いた。

農婦が年若い娘であつたこと、だが、返された無礼な口の利き様が今まで自分に向けられたことのないものだったからだ。

少年たちが住まつこの国はアルスディア王国と呼ばれる。王国と示す通り頂点に王が座し、その下に貴族、平民と続く明らかな身分制度があるのだ。平民は王族には服従、貴族に逆らうことはできない、と教育される。わざわざ言わずとも、常に差別されることによつて身分というものを心に沁み込ませるのだ。

娘はどこからどう見ても平民に見える。対して少年は鎧こそ身につけてはいないが、乗馬している上に王国の騎士の旅装であり、明らかに娘よりも身分は上だ。これまでの旅程で幾分草臥れてはいたが。

咄嗟に一の句が継げず、自分を凝視する少年を娘もまたじっと見続ける。やがて不快を顕わにした少年が吐き捨てるように言った。

「無礼な娘だな。口の利き方がなつていない」

睨まれた娘の方はと言えば、何が無礼なのか全く分からぬといたげにきょとん、と首を傾げ、唇の端を微かに吊り上げた。

「馬に乗つたまま、ものを尋ねるのは礼儀に適つているのかしらね、おぼつかちやま？」

「貴様つ……！」

かつとなり無意識に腰に伸びた少年の手を、娘はじつと見て嗤つた。

「気の短いことだわね。君はここに何をしに来たわけ？まさか気に入らないやつを片つ端から斬りに来たの？身分自慢で威張りたいならとつとと帰つた方がいいわよ」

「お前……つー黙つて聞いていればべらべらとー無礼にも程があるだろつー！」

怒りのために赤味が増した少年の険しい顔を、娘は怯えることなく見上げる。

「全然黙つてないと思うんだけど。まあ、いつか。何の用があるのかは知らないけど、確かにあれがグランデイルの砦よ、騎士サマ。お手打ちにしたいと言つなら構わないけど、やつてみる？」

終始不遜な態度をとる娘に腹が立ち、いつそ本当に手打ちにしてやろうかという思いが少年の脳裏に浮かんだが、これからのことを考えれば赴任先でいきなり刃傷沙汰を起こして心証を悪くするのは拙い。だが、平民でありながら無礼に過ぎるこの娘を放置したままでは沽券に係わる。

どうするべきかと睨みつけている少年と見合つたままだつた娘の視線が、不意に逸れた。つられて少年の視線もそちらへと向く。いつの間に近付いたのか、そこには呆れたような顔をした男が一人。

「何をしている？」

掛けられた声は低く、かなり着崩れているが騎士の略装であり、おそらくは皆の騎士だろうと少年は初めて馬から降りた。

「お初にお目にかかる。グランデイルの皆の騎士殿と御見受けする。私はキール・ラグナス。此度グランデイル砦配属を任命され赴任した次第。以後よろしくお願いする」

「…」

きつちりと騎士の礼を取つた少年 キールに男は一瞬目を眇め、

やれやれといった風に頭を搔いた。

「…固いな～。やつていけんのか、これ…？」

「やつていけなきゃ帰るでしょ」

お互に苦笑しながら言ひ合つ娘と男に、キールはむつと眉を寄せる。

「ま～いつか～？つーか、俺のそもそも用事はお前だ、リイル。サティスがお茶の時間に帰つて来ないつて怒つてたぞ？」

「あれ？もうそんな時間？」

「そんな時間だよ。さつさと帰れ

「はあーー。じゃあ、またね、おぼっちゃん」

ひらひらと手を振り、リイルと呼ばれた娘は軽やかな足取りで皆へと向かっていく。

「おぼっちゃんまと呼ぶなっ！！」

繰り返される無礼な発言に怒りを再燃させたキールが、遠ざかるリイルの背に怒鳴りつける。と、目の前の男が面白そうに笑った。

ふんすかと憤るキールを笑みを浮かべたまま興味深そうに眺めていた男は、服こそ着崩しているもののよく鍛えられていることが分かる精悍な身体つきをしていた。

「さて、新入り殿。俺達も行こうかね。俺はコール・ミルド。一応一番隊の隊長つてことになつてる。よろしくな」

「はい」

「それから、うちの皆の連中、堅苦しいのかなり苦手だから。できれば碎けた言い方をした方がいいぞ?」

「はい?」

碎けた言い方とは一体どんなものか。

今までいた場所では言われたことのない内容にキールは眉を寄せる。

「少年、今いくつ?」

笑みを崩さないままコールは尋ねる。

「今年15になりました。叙任されたばかりですでので」

「おお~若いね~。そつか、リイルと一緒に。こりやあ、面白い」  
楽しそうに笑うコールに首を傾げつつ、キールは先程の娘が同一年であることを知る。

「リイル、とは……先程の娘のようですが……いつたいどのようなお知合いなのでしょうか?」

「あー……リイルは名乗らなかつたのか。うん、まあ、その内判るんじゃないかな」

「判る……農民の娘でしょう?」

関係を訊いたのに何やら別の含みがあるようで、キールはわけがわからないといった表情を浮かべる。コールはその顔を見ながら特に何を言つてもなく皆へと足を向けた。

「うん。その内その内。ほら、さっさと行くぞ」

「え？あ、はい！」

納得できない気持ちのまま、キールは馬を引きながらゴールの後を追つた。

\*

「リィルーちゃんとお茶の時間には帰つていらっしゃこと、毎度毎度誰かを迎えるやらないと解らないのかしらあ！？」

柳眉を逆立てるとはこういうことか。

栗色の髪を奇麗に結い上げた美女が怒る様というのは、全くもつて逆らい難い。一応神妙にお小言を拝聴しつつ、リィルはそつと上目遣いで美女を眺める。

「あなたはただでさえ細過ぎるんだから、三度のご飯だけじゃ足りないのよ！」

「いや、でも、サティス？あのね……」

「言い訳は聞きました！言われたくないのならもう少し肉をつけなさい！」

「いや、肉つけろって言われても……」

無茶である。体質的につけたくてもつかないものはじょうがない。言い返そうとしたリィルだが、怒っていたサティスはその奇麗な顔につこりと笑みを浮かべた。それはそれは奇麗な、リィルにとってはとても怖い笑みを。

「なんなら毎日のご飯、倍にしてあげてもいいのよ？」

「ゴメンナサイ。ソレダケハヤメテクダサイ、オネガイシマス……」

此処、グランデイル砦の台所を預かるサティスに逆らえるつわものは滅多にいない。健康な身体の基本は食事から！を声高に叫ぶ美女に何をもつてすれば逆らえるのか。そして、もともと食の細いリィルには食事の量が増えるというのはとても苦痛なことなのだ。返事が棒読みで遠い目になつてもちょっと仕方のないことかもしれない。

「もう少しあがねない子ね。まあ、今日のところはこれで許してあげる」

そう言つて差し出された皿には小さめのサンドイッチと林檎のタルトが乗せられていた。

「…多い…」

「あら、これでも野郎共の三分の一よ？あなたは人一倍動き回つているんだから、このぐらいは必要なのよ。頑張つて食べなさい」

「ふあい…」

ぱくり、とサンドイッチを口に放り込む。一口サイズなので食べやすく、塩氣の効いたハムと野菜が美味しい。もう一つは胡椒の効いた卵である。どちらもリアルの好物だ。もぐもぐと口を動かしている間にサテイスがお茶を淹れてくれた。ほんのりと甘みのあるこのお茶もリアルが好んで飲むものだ。

「ねえ、サテイス」

「なあに？」

小さなサンドイッチを飲み込み、タルトの端をフォークで崩しながらリアルは年上の友人に話しかける。

「さつきね。新しい騎士に会つたよ」

「あら。…どうだつた？」

目を細めるサテイスにリアルは慎重にタルトをフォークで刺しながら（タルトは油断するとボロボロと崩れるのだ）笑みを浮かべる。

「ものすつじい、生意気なおぼっちゃま！」

「あらあら。ふふふ…それは楽しみねえ」

「何日もつかな～」

「賭けましょうか？」

「それはダメ」

ぱくん、とタルトを口にして満足げに皿を細めたりアルに、サテイスは意外そうに片眉を上げた。

「…育てた方がいいのかしら？」

「たぶん。お願ひね？みんなにも言つといて

「わかつたわ。逃げ出さなによつ扱きましょつ」

「それと、わたしのことは内緒で」

「…どうして、つて訊いていいかしら?..」

「面白いから」

「リイル…」

あんまりな理由にサティスは呆れつつ額に手を当てる。

今度の新入りは余程リイルの癪に障つたようだ。それでも追い出す方向に考えないのは、面白いとは別の理由があるのでう。

「ねえ、サティス」

「なあに?」

タルトを半分片づけたリイルが皿の上を見つめながら声をかける。

「明日は林檎のパイがいいな」

「…はいはい」

くすくすと笑いながらサティスは崩れるタルト生地と格闘するリイルの頭を撫でる。明日から少しばかり忙しくなりそうだと思いつながら。

III 音楽（後編） 意識の発達と音楽

語が進むにつれて、なつてゐる気が……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3936ba/>

---

砦物語

2012年1月10日09時53分発行